

イギリス詩の研究

圓月勝博

大学における文学研究の居場所が年々縮小し、イギリス詩の研究者も、専門分野の自律性を確保することが難しくなっている。そのような環境の変化がもたらした新たな動向として、イギリス詩を隣接する分野と関連させて、研究の裾野を広げようとする試みが顕著に見られるようになってきた。吉と出るか凶と出るかは、誰にもわからないのだが、時代が求める一つの風潮であることには疑問の余地がない。イギリス詩の研究がどのような領域との接点を探っているのかという問題に注意しながら、本年度の研究成果を時代順に回顧し、その展望について考えてみよう。

梅正行・小田原謠子共著『刻まれた旅程——英文学から英語圏文学へ』（勁草書房、2015.3）は、中世イギリス詩人ジェフリー・チョーサーから現代インド作家クシュワント・シンまでを二人三脚で一気に駆け抜ける研究書で、英文学の裾野を時間と空間と主題すべての点で広げようとする意思を明快に示している。本稿の対象とすべき論考は、サー・トマス・ワイアット、サー・フィリップ・シドニー、エドモンド・スペンサーなどを扱う小田原担当の前半の数章だが、宮廷外交、グランド・ツアー、書物史などの関連研究領域を次々に提示する知の疾走感に瞠目した。『関西英文学研究』第8号（日本英文学会関西支部、2015.1）に掲載された水野眞理「ヒロイック・カプレットの来た道」は、アレグザンダー・バークレイを経て、小田原と同じくスペンサーを議論の終着点としているが、こちらはゆっくりとした足取りで、16世紀イギリス詩の韻律が奏で始めた新たな音楽性に精緻な分析を加えている。

16世紀のスペンサーの最大の後継者と言えば、17世紀のジョン・ミルトンだが、辻裕子の『ジョン・ミルトンの思想と現代』（世界思想社、2014.11）は、長年の研究成果を踏まえて、フェミニズム、エコロジー、平和思想などに議論を関連させながら、この初期近代イギリス詩の巨人の現代性を力説する。それに対して、ミルトンに対する愛情では辻に優るとも劣らぬ野呂有子は、『詩篇翻訳から「楽園の喪失」へ——出エジプトの主題を中心として』（富山房インターナショナル、2015.2）において、現代的問題意識をいったん封印した上で、聖書解釈と創作が不可分である17世紀キリスト教詩人像を浮き彫りにしてみせる。奇しくもほぼ同時に刊行された経験豊かな二人のミルトン研究書は、過去の作品を研究するとき、研究対象の現代性と歴史性のどちらに力点を置くべきかという問題をあらためて読者に問いかけることにもなった。この二律背反の解消に組織的に挑んだ著作として、秋山嘉を責任者とする総勢12名から成る「十七世紀の英詩とその伝統」研究チームによる『十七世紀英詩の鉅脈——珠玉を発掘

回顧と展望

する』(中央大学出版部, 2015.3)に注目しておきたい。大部の翻訳アンソロジーと言ってしまえば、それまでの話なのであるが、一般には読まれることが少ない詩人の作品を主題別に編成することによって、17世紀イギリスの歴史を現代的視点から語り直そうとする共同研究の成果なのである。歴史学との関連性を求める方向性は、言うまでもなく、この四半世紀の文学研究の主流で、植月恵一郎・廣本和枝共編『文学と歴史の曲がり角——英米文学論文集』(英光社, 2014.11)に収録された清水英之と山木聖史のジョン・ダン論2編や植月のマーヴェル論においても、自覚的に実践されている。また、「文学史=政治史」という勇ましい帯をつけて刊行された富樫剛編『名誉革命とイギリス文学——新しい言説空間の誕生』(春風社, 2014.8)には、ミルトン、マーヴェル、ジョン・ドライデンを一気呵成に論じる編者の論考に加えて、マッシュュー・プライアーに着目する西山徹の論文などが収録されている。サミュエル・ガース『薬局』(音羽書房鶴見書店, 2014.7)の編訳者でもある西山は、イギリス文学研究における17世紀と18世紀の連携を強化することも構想しているようだ。

本格的な18世紀イギリス詩研究には、ギリシア・ローマの古典の素養が欠かせない。高谷修の『ギリシア・ローマ文学と十八世紀英文学——ドライデンとポープによる翻訳詩の研究』(世界思想社, 2014.8)は、古典語の研鑽を積み重ねてきた著者の畢生の研究成果である。上記ガース訳書の共訳者の一人としても名前を連ねる高谷は、『英文学評論』第87集(京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会, 2015.2)に『薬局』と古典叙事詩の関連性を探る論文を寄稿しているだけではなく、後に王位に就くことになるアン王女のための『祝婚歌集』(1683年)における古典的伝統に着目した論文も日本ジョンソン協会編『十八世紀イギリス文学研究——共鳴する言葉と世界』第5号(開拓社, 2014.7)に発表して、俄然筆に勢いが出てきた。同じく『十八世紀イギリス文学研究』第5号に掲載されている三原穂の「想像的虚構に対する実証的検証」は、トマス・チャタトンが刊行したトマス・ローリー詩の真贋論争を丹念に追うことによって、スコットランド研究などにも裾野を広げつつ、文学とは何かという大問題に真っ向から取り組む好論文で、新進気鋭の著者の真摯な探求が大輪の花を咲かせることを祈らずにはいられない。

詩の研究者の層が比較的厚いロマン派研究は、本年度も質量ともに充実しているが、まず、中堅実力者の単著2冊を挙げておこう。吉川朗子の *William Wordsworth and the Invention of Tourism, 1820-1900* (Ashgate, 2014.5) は、エコロジー文学批評の先行研究を手堅く踏まえた上で、ウィリアム・ワーズワスの著作全体を概観し、19世紀イギリス観光産業の隆盛を分析してみせる快作である。吉川の著作と甲乙つけがたい本年度の研究成果と言えば、佐藤光の『柳宗悦とウィリアム・ブレイク——環流する「肯定の思想」』(東京大学出版会, 2015.1)しかあるまい。佐藤の浩瀚にして周到な研究書は、柳とブレイクをめぐる物語を縦横無尽に語り尽くし、イギリス詩研究の隣接

イギリス詩の研究

領域の拡大に画期的な貢献をしている。なお、池亀直子『イギリス芸術教育思想における独創性と公共性——レノルズ、ブレイクとロマン主義の子ども観』（風間書房、2014.3）の第7章も柳のブレイク論を取り上げており、芸術教育に関心のある方には併読をお奨めしておきたい。日本におけるロマン派詩人の受容史としては、北村透谷から探索を始める菊池有希『近代日本におけるパイロン熱』（勉誠出版、2015.2）も、近代日本文学研究者にも読んで欲しい労作である。ロマン派研究に多大の貢献をしてきた出口保夫の『評伝ワーズワス』（研究社、2014.11）は、愛情溢れる伝記を味読する楽しみを思い出させてくれる一冊で、学生にも安心して薦められる基本図書の刊行を心から祝いたい。河村民部『ワーズワス「抒情民謡集」再読』（英宝社、2014.4）は、読者を作品に立ち返らせるために、簡潔ながら気迫あふれる議論を展開している。紀要等に発表された論文の中では、森田晃司が『關大英文學』（坂本武教授退職記念論文集刊行委員会、2015.3）に寄稿している「ワーズワスと動物」がロマン派詩人研究に近代ペット文化論を導入しようとする意図が明確で、斬新な知的刺激を与えてくれる。ジョン・キーツも変わらぬ人気を誇っているが、『中国四国英文学研究』第11号（日本英文学会中国四国支部、2015.1）に掲載された児玉富美恵「キーツの『エンディミオン』創作時におけるシェイクスピアとチャタトン」の丁寧な仕事が特に印象に残った。翻訳に関しては、ロマン派とヴィクトリア朝をつなぐ自然と狂気の人材貧農詩人の代表作を達意の日本語で訳出した森松健介編訳『新選ジョン・クレア詩集』（音羽書房鶴見書店、2014.12）が貴重な新刊である。

ヴィクトリア朝詩の研究書としては、関良子の *The Rhetoric of Retelling Old Romances: Medievalist Poetry by Alfred Tennyson and William Morris*（英宝社、2015.2）が19世紀イギリスにおけるアーサー王伝説の意義を気鋭の若手研究者らしい思い切りの良さで論じていて、大きな将来性を感じさせてくれた。翻訳の方面では、中岡洋訳『シャーロット・ブロンテ全詩集』上・下巻（彩流社、2014.9）および『ジョージ・エリオット全集』第10巻として刊行された大田美和他5名共訳『詩集』（彩流社、2014.12）の2冊の訳書が本年度の特筆すべき収穫と呼べよう。小説家として有名な両作家の詩にも正当な関心を向けて、ジャンルの壁を乗り越えた上記2冊の完成に喝采を送りたい。熱心な研究者を持つジェラード・マンリー・ホプキンズに関しては、本年度も個人的な論文が着実に発表されている。『英語英米文学』第55集（中央大学英米文学会、2015.3）に掲載された笹川浩論文と、『アカデミア』文学・語学編第97号（南山大学、2015.1）に掲載された山田泰広論文に加えて、上記『關大英文學』に掲載された高橋美帆論文がスプラング・リズムの名手の韻律の音楽性に肉薄して、ホプキンズ研究の醍醐味を教えてくれた。日下隆平が『人間文化研究』第2号（桃山学院大学人間文化学会、2015.3）に寄稿した「James Thomson (B.V.) と T. S. Eliot」は、ヴィクトリア朝をモダニズムにつなぐ貴重な論考で、時代区分の越境を試みる意欲作

である。

本年度は、没後 50 周年記念だからというわけではないだろうが、T. S. エリオット研究が豊作であった。まず、エリオットの思想史的側面の解明に長年にわたって取り組んできた村田俊一が『T・S・エリオットの思索の断面——F・H・ブラッドリーとニコラウス・クザーヌス』(弘前大学出版会, 2014.10)を刊行して、研究者生活の見事な集大成を行っている。紀要や学会誌にもエリオットの名前が続出で、『リーディング』第 35 号(東京大学大学院英文学研究会, 2014.12)掲載の井上和樹が見事な英語で書き上げた「伝統と個人の才能」論、『英語英米文学』第 55 集(中央大学英米文学会, 2015.3)掲載の北沢格による初期未発表詩をめぐる論考、*T. S. Eliot Review* 第 25 号(日本 T. S. エリオット協会, 2014.11)掲載の滝沢博による精緻な「エリオット氏の日曜朝のお勤め」論、『近代』第 112 号(神戸大学近代発行会, 2015.3)掲載の野谷啓二による斬新なイングリッシュネス論など、まさに汗牛充棟の賑わいを呈している。書簡集が順調に刊行され始め、2 巻本の校訂版詩集も登場して、全集出版も予告される中、英語圏モダニズムの語り部でもあったエリオットの再評価が活発になることを期待したい。秀作が満載の上記『關大英文學』には、竹内恵子の W. B. イェイツ論と山口和夫の D. H. ロレンスの初期詩作品論も掲載されていて、それぞれ個性溢れる秀作だが、ロレンスの詩を論じるにあたっては、最新のケンブリッジ版詩集も参照していれば、専門家による詩人ロレンス批評の最新の指針として、さらに有益な論考になっていたであろう。モダニズム以降のイギリス詩に関しては、川成洋・吉岡栄一共編『英米文学にみる仮想と現実——シェイクスピアからソロー、フォークナーまで』(彩流社, 2014.10)に収録された木村聡雄の「一九六〇年代イギリス詩における音楽的展開」がおもしろい。書物の副題が与える期待感を裏切り、明らかにウィリアム・フォークナー以降の時代に属するリバプール詩人エイドリアン・ヘンリを紹介する論考で、ポップ・カルチャーにおける詩と音楽の複合芸術の可能性を論じることによって、詩の音楽性に関する現代的視角を提供する刺激的な一文であった。翻訳の方面では、卓抜なワーズワス研究によって世界に通用する実力を証明した吉川朗子が主題別に編纂された『エドワード・トマス訳詩集』(春風社, 2015.1)も続けざまに刊行して、詩人や作家の中に愛読者が多いことで知られる実力派詩人を日本の一般読者にも心を込めて紹介してくれている。

研究の裾野が広がることは、決して悪いことではないが、その成果があまりに領域横断的に拡散しすぎることによって、優れた詩をとにかく一度自分で読んでみたいという若い学生の要望からますます遊離して、教育現場におけるイギリス詩の研究者の孤立感を深めることにつながる危惧もときに感じないわけでもない。そのような杞憂で少し暗い気分になり始めていたとき、『紀要』第 10 号(筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部, 2015.1)に掲載された宮原牧子の「“The Highwayman”に見る伝

イギリス詩の研究

続の継承とその更新」と出会って、大いに元気もらった。本稿の読者ならご存じのように、BBC主催の全国電話投票によって選ばれた人気上位100位の詩が *The Nation's Favourite* (BBC Books, 1996) という書名で刊行され、詩のアンソロジーとしては珍しくロングセラーとなっている。バラッド研究の若手のエース宮原の論文は、堂々15位に食い込んだアルフレッド・ノイズの「追剥」の楽しみ方を懇切に教えてくれる文章なのである。実は、イギリスの詩を専門外の学生にも紹介することができる数少ない場となった講義科目において、筆者が採用している教科書が上記アンソロジーで、毎年、どの作品を取り上げて、どのような学習目標を設定するかについて、一人で頭を悩ましていたため、面識はないにもかかわらず、考えるべき素敵な材料を提供してくれた著者に勝手に親しみを覚えた次第。研究と教育の対話を促進するような地道な教材研究なども、これから必要になるのかもしれない。 (同志社大学教授)